

石黒立人
tatsuhito ishiguro

八王子遺跡から出土した 弥生中期以前の土器

I 期の資料

1-1 時期区分

突帯紋系土器期終末段階から遠賀川系土器盛行期を1期～6期に区分した。

1期 / 包含層資料 // 朝日遺跡貝殻山貝塚地点

伊勢湾周辺地方の突帯紋系土器については、かつて鈴木克彦氏が概略4時期に区分し、前半2段階が西之山式から五貫森式、後半2段階が馬見塚式に対応するとした。八王子遺跡から出土した資料は少ないので定量的には扱えないが、近接する山中遺跡の様相と比較して大差ないものと考えられる。つまり、馬見塚式でも新しく、その終末に相当する段階と考えられる。

遠賀川系土器（1類：以下は本文記載の類別区分とする）で注目されるのは、少量ながら出土した、接合部を段とする壺と鉢である。壺は、口縁部が「く」字状に折れ、頸部から少し下がった位置に段がある。鉢は、外面は段より下部にミガキ、内面にもミガキが施されている。各1点ずつという、量的にはまことに貧弱としか言いようがないし、甕など他の器種が出土しなかったことも残念ではあるけれども、出土したという一点では、当センターが実施した朝日遺跡貝殻山貝塚南地点の調査資料に匹敵する可能性を有する*。上述した突帯紋系土器の存在と合わせて注目すべき資料であると考えられる。

2期 / Ba-SK08・J-SD42// ミツ井遺跡・月縄手遺跡古段階

1類はA類に限られる。1A類の壺は、頸部に段をもつが口縁部はゆるく外反するもの、頸部が削り出し突帯/無沈線、段/沈線1条、沈線2条など、肩部は段/少条沈線、削り出し突帯/少条沈線、ミガキ後連弧紋などがこの時期である。甕は体部が張らず、沈線1条が主か。

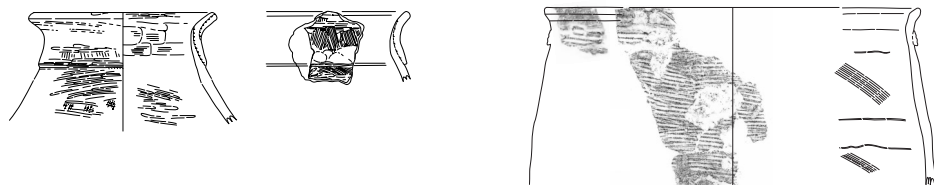
ところで、八王子遺跡ではこれまでのところ明確な木葉紋は出土していない。まとまって出土している西志賀遺跡や朝日遺跡貝殻山貝塚地点と目立たないミツ井遺跡や月縄手遺跡との対比を参考にすれば、それは時期差ではなく遺跡の性格に関係する可能性が高いであろう。八王子遺跡では連弧紋は出土しており、各遺跡における紋様構成内容が中心的な遺跡とそれ以外という一種周圈的な空間差を生じている印象を受ける。

この時期には半截竹管を工具とする平行線紋が甕に施されるものがある。しかし、それを1B類の祖型としたかつての認識は誤りであった。それは、伊勢湾西岸部でも南よりの金剛坂遺跡では1A類の中に一定量存在することがわかってきたからで、豊橋市白石遺跡の類例も平行線が全周しないことから、1B類の祖型にはならない。この点について訂正したい。

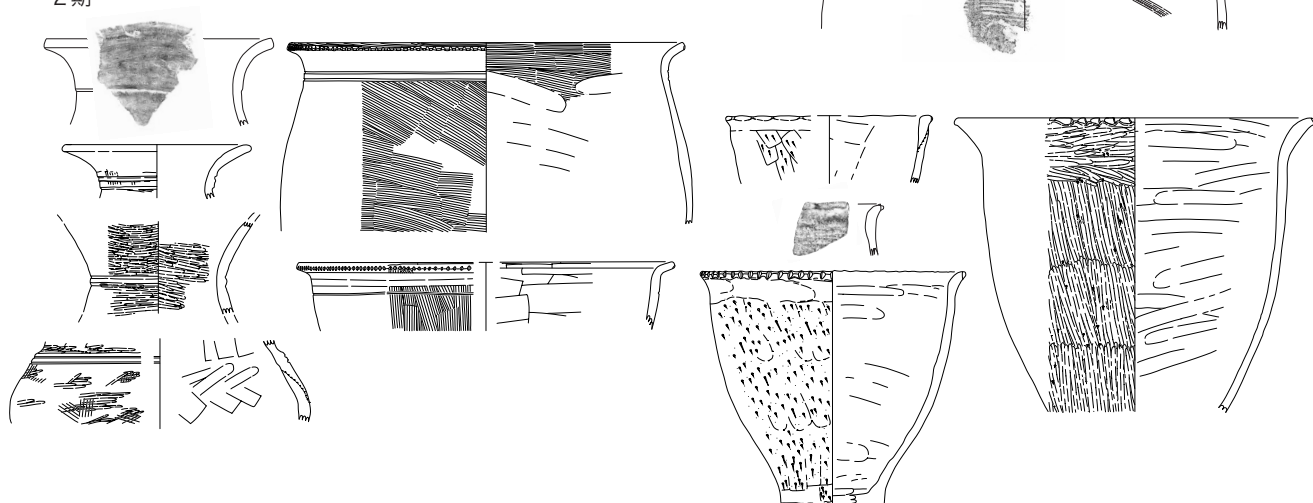
2類甕は口外帯をもつものがこの時期に属すると思われるが、共伴関係の決め手には欠ける。月縄手遺跡には皆無であるのに対して、ミツ井遺跡や八王子遺跡には一定量存在する点は時期差によるものと考えられる。八王子遺跡においては、資

* 参考になるのは、『朝日遺跡VI 新資料館地点の調査』（愛知県埋蔵文化財センター 2000）掲載のSB07出土資料。資料そのものは新旧が混ざっているけれども、古相資料がその存在を示唆している点を重視したい。

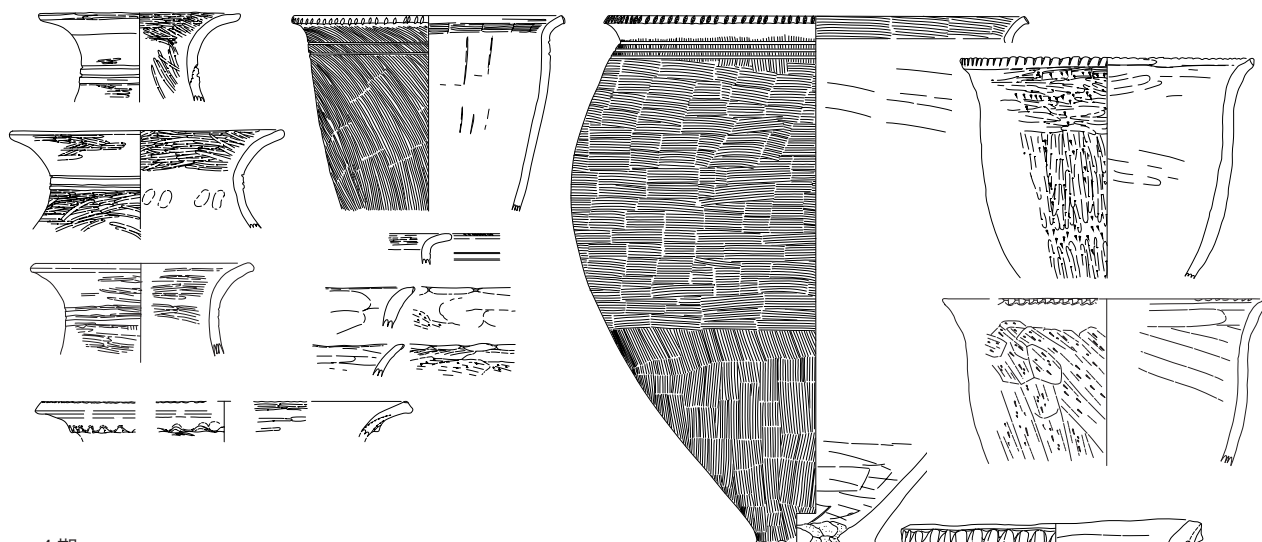
1期



2期



3期



4期

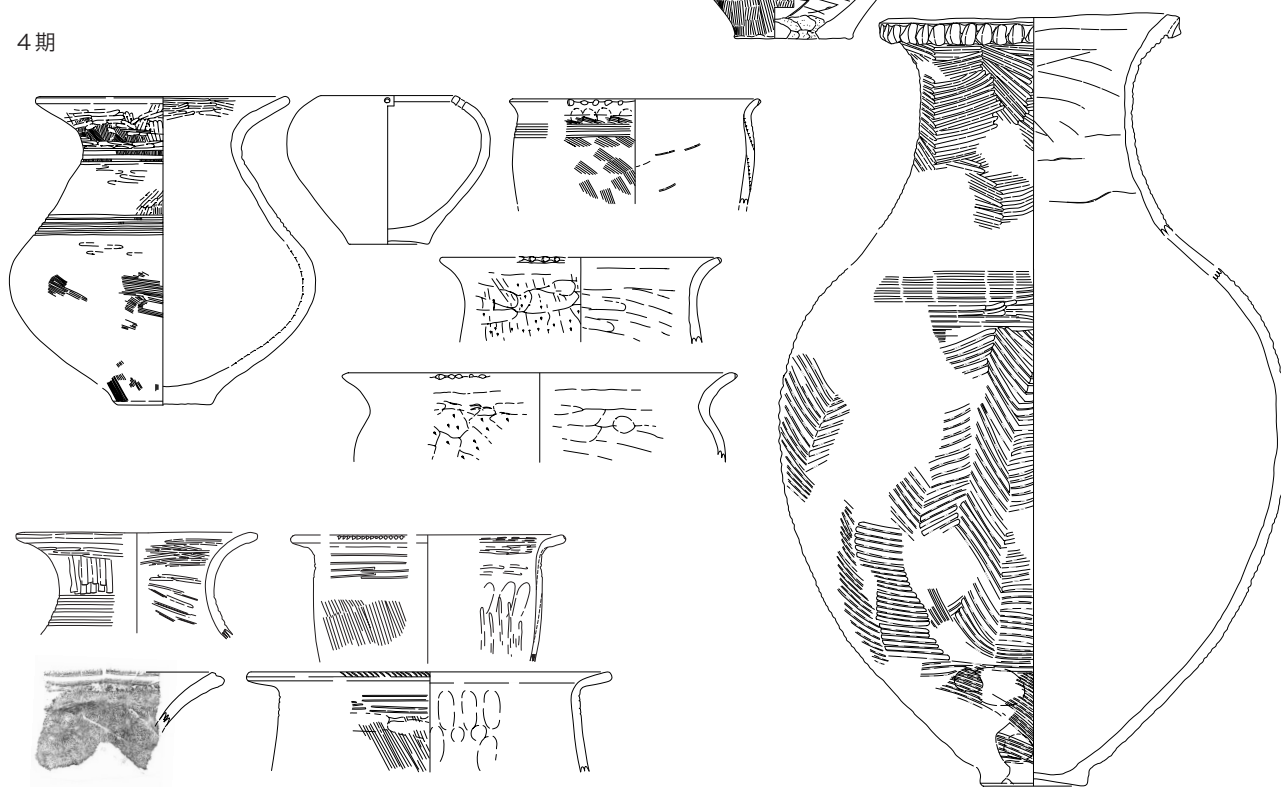
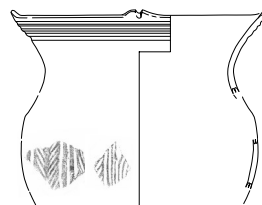
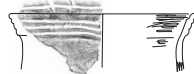
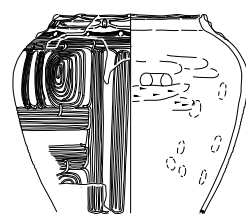
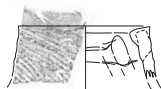
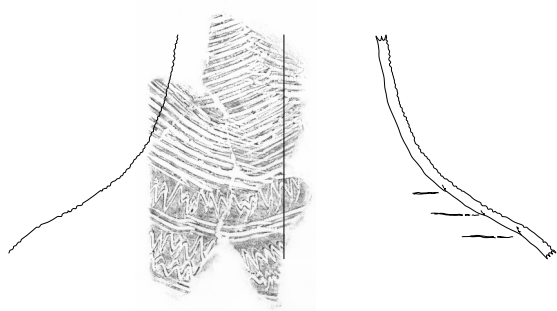
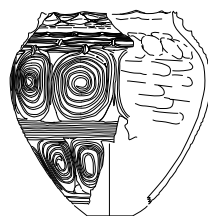
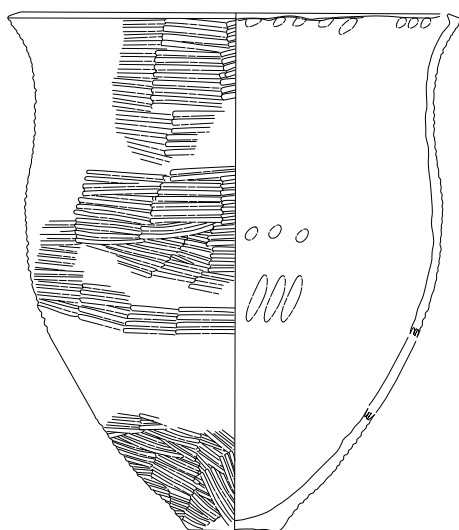
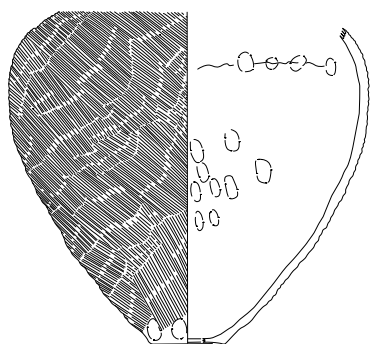
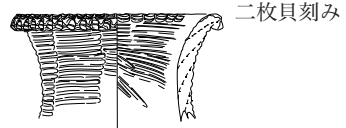


図1 弥生土器の変遷 I期



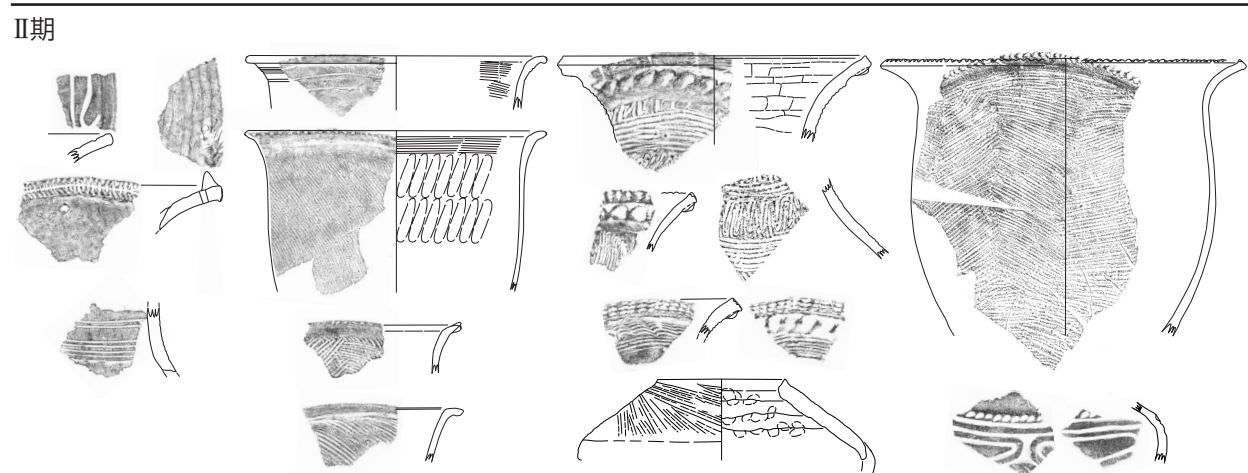
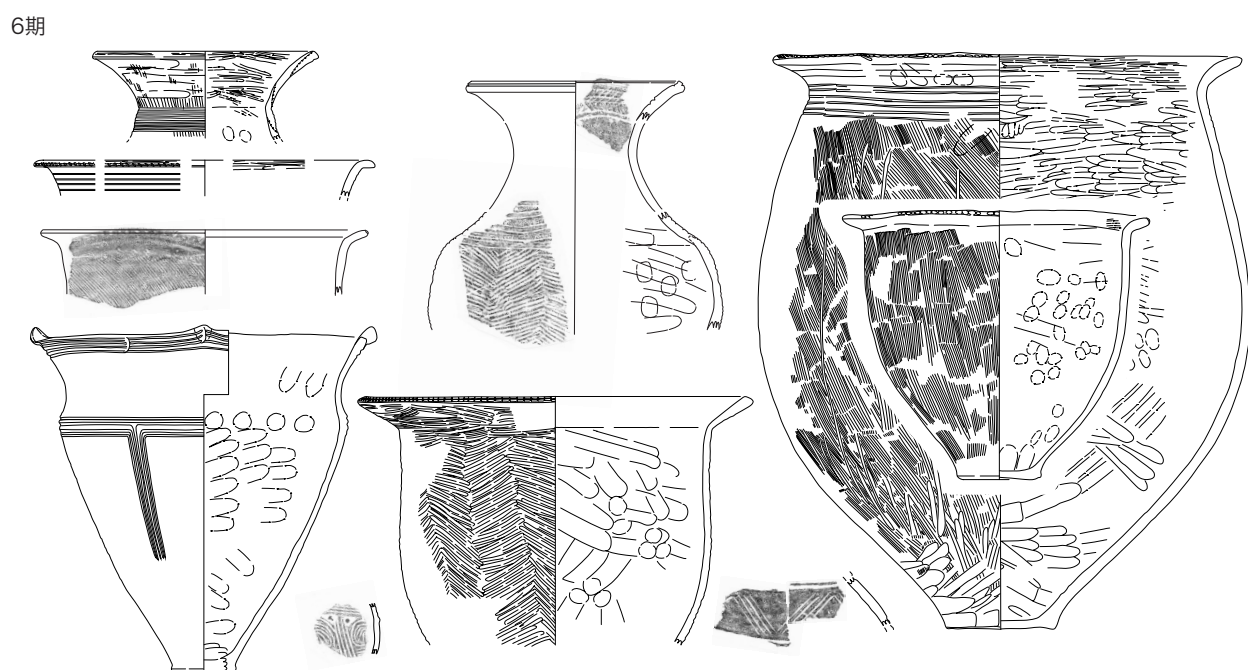
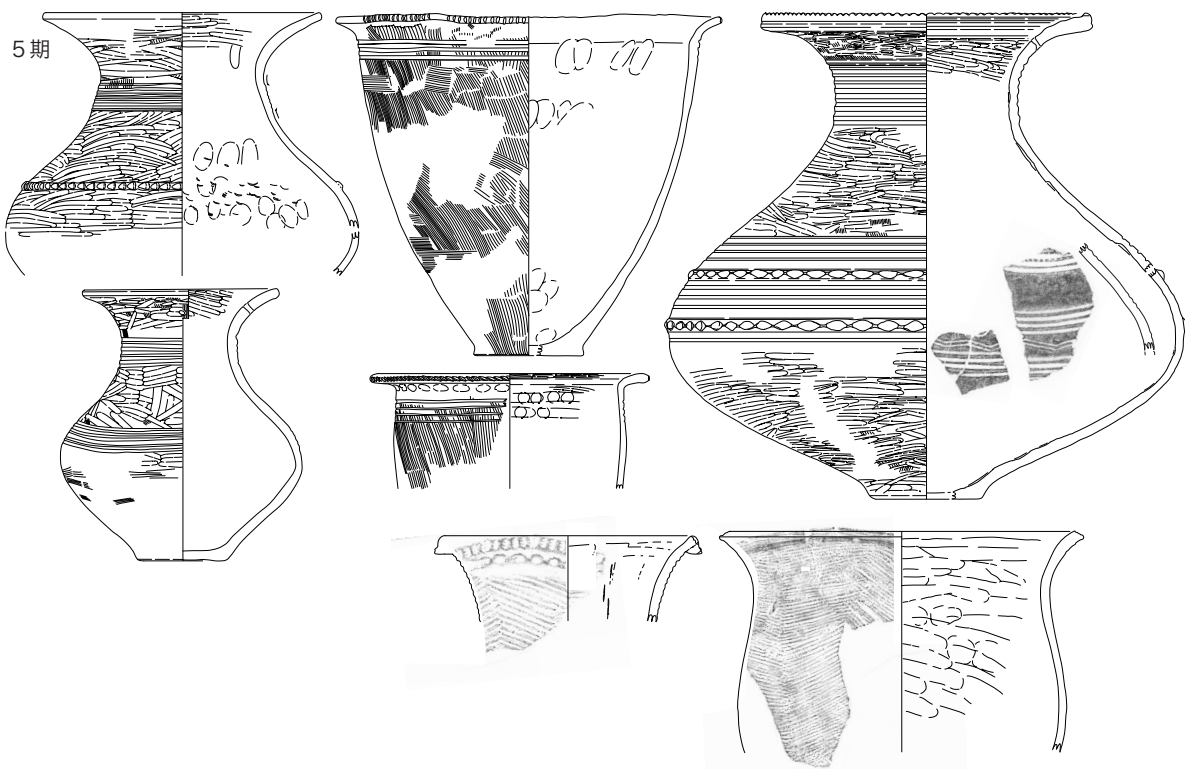


図2 弥生土器の変遷 I期～Ⅱ期



料の多くは次期に属す遺構中からいずれも破片として出土しており、当期からの混入と考えられる。

3類も2類同様に破片の出土に限られる。口縁部が尖るものや丸いものがこの時期か？としか言えない。

3期 /J-SD36・Ba-SD38 古相 // 月縄手遺跡 新段階

1類はB類が出現の兆しをみせる。1A類壺は、頸部に段／沈線2条、肩部に削り出し突帯／3条を主とする。甕は1条～2条の沈線がめぐる。

2類甕はかなりの頻度で出土する。頸部の凹面帯は不明瞭になる。

3類は相変わらず共伴資料がなくよくわからない。Ab-SK150-971 や Ab-SK183-323 が該当か。いわゆる樫王式と水神平式の間であろう。

4類は Ab-SK140-320 が該当か。とすれば相對渦巻紋系列の最終段階に相当することになるのだが。

4期 /Ba-SD24・Ba-SD38 新相 // 高蔵遺跡 環濠

1類は Ba-SD24 出土資料をみると意外なほど各種そろっているにもかかわらず、2類は含まれておらず、この時期には衰退するということか。3類には波状紋や縦位羽状紋が出現しているが、壺はいずれも口縁端部無紋で、押し引き紋は伴っていない。

八王子遺跡では Ba-SD38-166 が他に類例の無い、いささか評価に困る資料である。形態を除けばいわゆる水神平式に属するものであり、この時期の資料に含めた。

4類は渦巻紋が区画紋を伴って独立配置されるものが現れる。

5期 / 混在資料 // 山中遺跡

1A類壺は多条沈線、甕は沈線3条以上。3類は口縁部に押し引き紋。4類は羽状沈線紋が出現。

6期 / 混在資料

今回抽出した一群である。その是非は今後の課題。

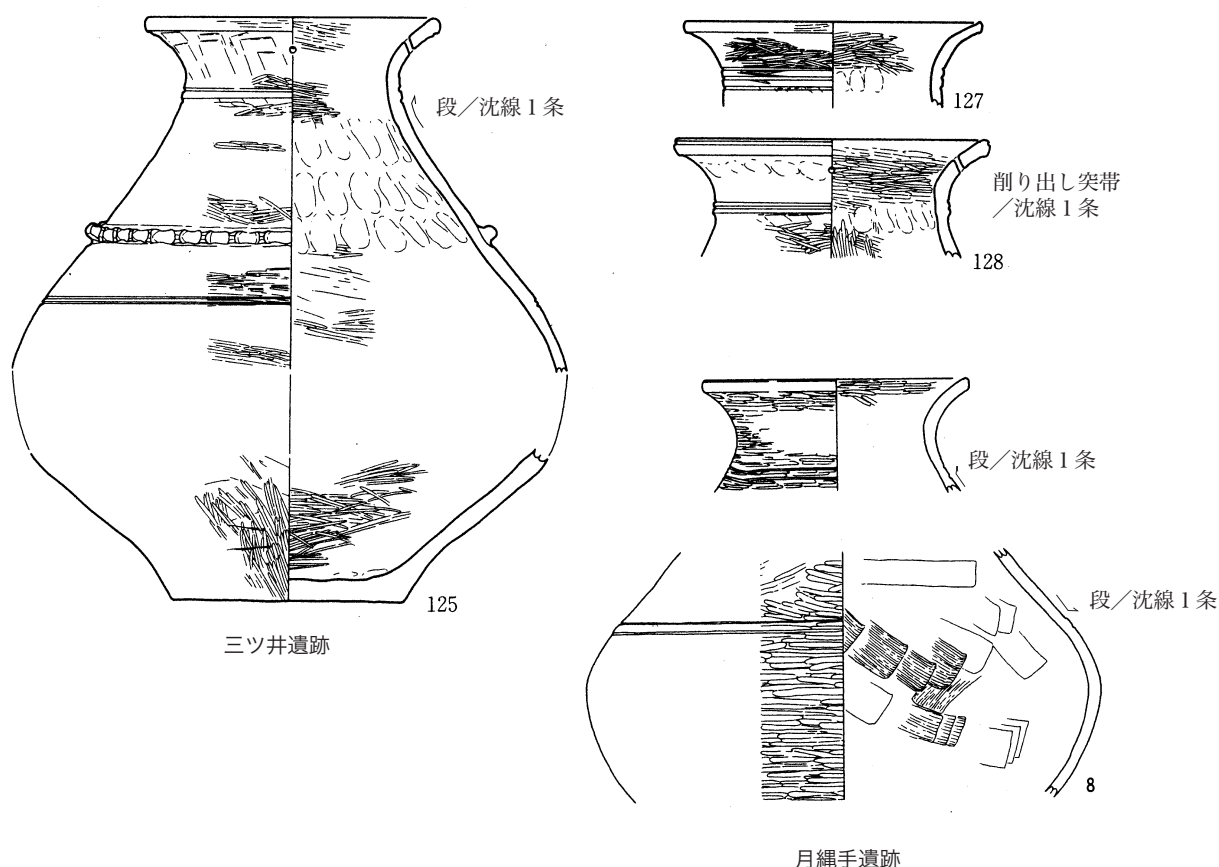
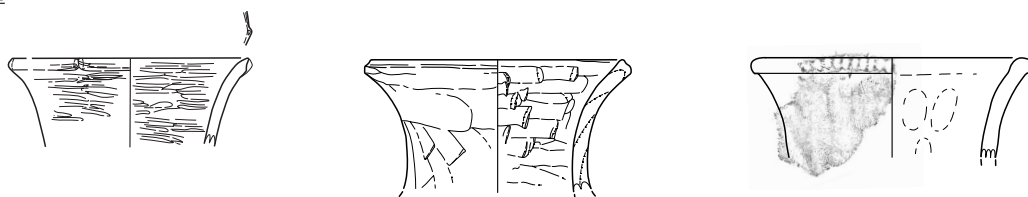
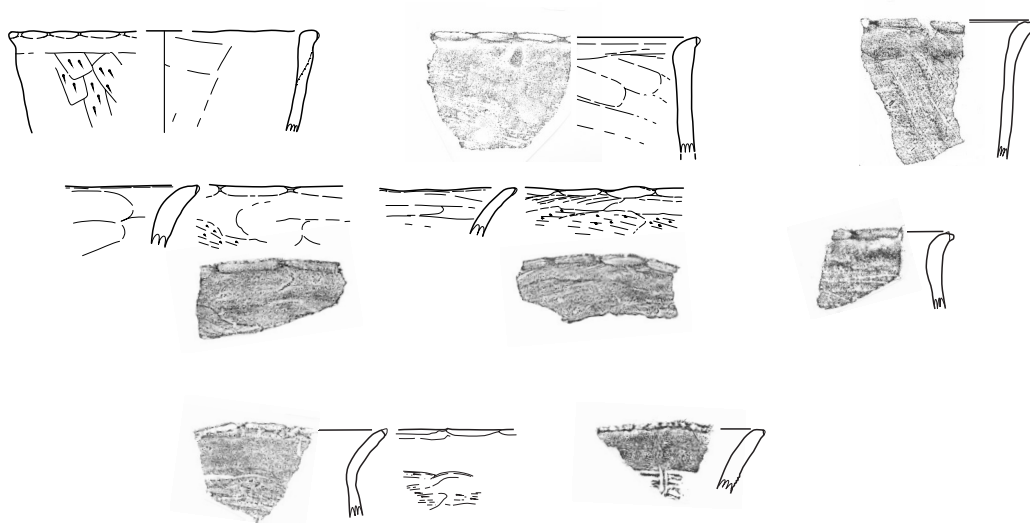


図3 「段／沈線」壺 参考資料

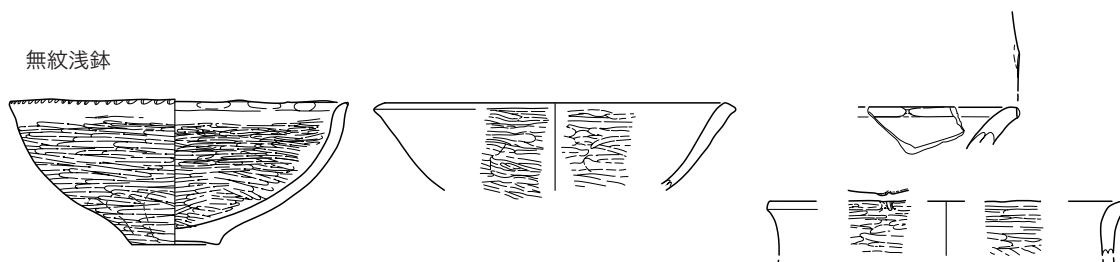
壺



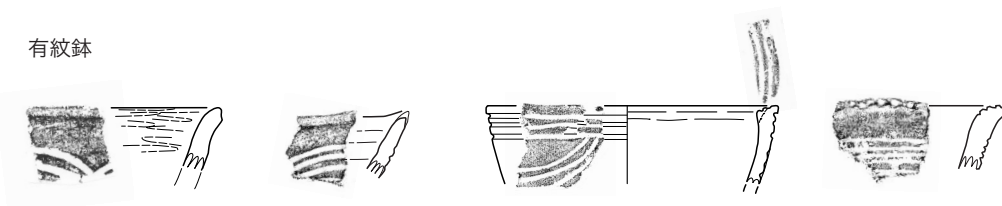
甕／口外帯



無紋浅鉢



有紋鉢



(羽状紋鉢)

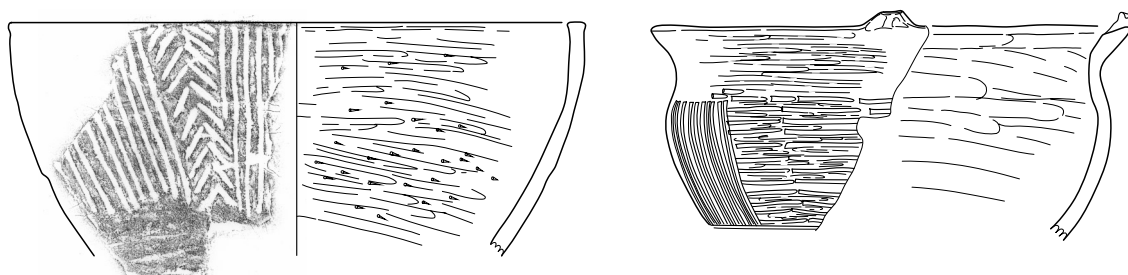


図4 八王子遺跡2類土器



1-2 2類について

2類土器群については「削痕甕」を基調としつつも、胎土・焼成が共通する壺や有紋の浅鉢類を含めた土器群として認識した。

「削痕甕」については、当センターが調査した一宮市三ツ井遺跡で口外帯をもつ初期形態が出土した。それについて中部高地の水式深鉢と関連があることを永井宏幸氏が指摘した。八王子遺跡の区分では2期に含めたが、その前半に重心があるろう。また、名古屋市月縄手遺跡で認められた削痕甕の変容過程が八王子遺跡では認められない点は、分布の中心もしくは近傍に位置していることを示していると考えられる。

鉢は、口外帯を有するものを中心に上げたけれども、中部高地との関係でいえば浮線紋浅鉢が欲しいところだ。濃尾平野において浮線紋土器は五貫森式から馬見塚式にかけて安定して出土しているが、檜王式段階になると出土例が激減する。その一方で浮線渦巻紋土器が支配的になる。それは単に浮線紋土器内部での器種の交替にとどまらない、浮線紋土器群そのものの内部的変化に関係するものであった可能性がある。

今回、八王子遺跡で出土した資料については、北陸系統の資料との識別に関して困難を伴う部分もあり、今後の課題である*。

1-3 3類について

条痕紋系土器はほとんどが二枚貝条痕であり、それ以外の工具は弥生中期以降に限られる。全形のわかる資料が少ないので、時期的な変遷を组成的に捉えることは難しい。とりわけ条痕紋系土器期前半（檜王式並行期≒2期・3期）資料について、属性を特定することに困難が伴う。例えば、深鉢Ba-SD38-166は、形態的には口縁部が外反しない砲弾型で古い特徴を示しているが、口縁端部には押し引き、体部には口縁部が横位条痕、下位が縦位条痕で、後半期（水神平式並行期≒4期以降）

の特徴を有している。

Ab-SK183-323は、体部外面は横位条痕、口縁端部は面をもって内側に張り出している。口縁部だけをみれば古いが、体部外面が左上がりの斜位条痕ではなく、口縁部も小さくはあるが外反しており、新しいといえる。

壺においては、Ba-SD24-123のように縦位羽状条痕が確立していながら口縁端部が無紋の例もあり、口縁部片のみでは時期区分に困難な例が少なくない。口縁端部が無紋の壺は外面に二枚貝条痕を施すものが一般的だが、外面がナデ仕上げで無紋のものもある（Ba-SD35-534）。所属時期が遡るのかもしれない。口縁端部は面をもつものと丸いものがある。丸いものは、一宮市史掲載の元屋敷遺跡資料中にもあり、一宮市周辺地域で類例が多いようだ。これについては、突帯紋系土器からの直接的な系譜が濃厚ということか？この点でAb-SD65-431が突帯紋系土器のように外側に突出しているのは示唆的である。実際に古いのかかもしれないが、突帯はユビで刻むもの、棒状工具で刻むものがある。Ba-SD24からは口縁端部が薄く丸い例もあり、口縁端部が平坦か、丸いか、無紋かどうかは時期的な新古の指標とはなりがたい。また、口縁部に押し引きが施される壺には、口縁端部が平坦なものと丸いものがある。また二枚貝押し引きは口縁端部に2段めぐるものがある。一般的なのは1段であり、時期差になるのかどうかであるが、少なくとも地域差であることは間違いない。

このように、3類に関してはその属性の時期を確定できない資料が少なくない。

上記の他に、今回新たに付け加えることができた事実としては、口縁部が無突帯でそのまま刻みを加えている壺が一定量出土したこと、口縁端部に二枚貝背面圧痕が施された壺・深鉢・甕が出土したことである。

3類土器の多くは搬入品であり、美濃加茂市・可児市周辺的美濃地方内陸部、矢作川流域を搬出地域と想定できる。

* 無紋の浅鉢は稲沢市野口北出遺跡（稲沢市教育委員会 2000）、大垣市荒尾南遺跡（（財）岐阜県文化財保護センター 1998）などでも出土している。また揖斐川上流旧徳山（現藤橋）村長古遺跡（（財）岐阜県文化財保護センター 1994）では無紋と有紋（浮線紋紋様の沈線化したもの）の鉢に加えて壺・甕も出土しており、濃尾平野並みの安定度である。可児市宮脇遺跡（可児市教育委員会 1973）でも口外帯を有する鉢（甕？）が出土している。今後資料を精査する必要がある。なお、（財）岐阜県文化財保護センター資料の調査にあたっては松岡千年氏に便宜をはかって頂いた。



1-4 4 類について

浮線渦巻紋土器あるいは渦巻沈線紋土器の変異

形態は頸部が彎曲する壺形・甕形と口縁部が内傾する無頸壺形がある。サイズは推定高で 20cm 超のものから 6、7cm のものまでである。体部外面の紋様は、大は上下 2 段に区画され、小は 1 段になる傾向にある。八王子遺跡出土資料は時期的には幅がありそうで、型式学的には次のようになろう。

第 1 段階 口縁部および肩部に浮線紋、肩部紋様带上段にはメガネ状浮帯がめぐる。大形品の体部は沈線帯で上下に区画され、2 ケー対の渦巻紋が連続して配置される。小形品は渦巻紋が 1 段めぐる。

第 2 段階 メガネ状浮帯に隆線が充填され、体部も単位区画紋によって縦横に区画され渦巻紋が独立して配置される。

時間的変遷としては、古いものは口縁部と肩部の紋様が一体で、また岐阜県阿弥陀堂遺跡資料を参考にすれば、古いものほど巻きが少ない。新しくなると上述の第 1 段階以後のように口縁部と肩部の紋様帯が分離して無紋帯が加わるとともに、巻きが増え、構成する沈線が多条化する。

渦巻紋の変異として弧紋がある。弧紋には、縦位弧紋と横位弧紋がある。渦巻紋は弥生前期で消滅するのに対し、関連があるのかどうか不明だが、弧紋構成そのものは弥生中期中葉まで存続する。

羽状沈線紋土器の変異

4 期以降に盛行する羽状沈線紋土器は、その紋様が施された土器をそれとして一括すれば、形態には壺形・甕形・鉢形がある。前 2 者は山中遺跡ですでに類例が知られており、口縁部には山形状突起を配し、口縁部外面は肥厚する・肥厚しないに関わらず平行沈線帯がめぐる。前者は北陸地方の「柴山出村式」との関連も指摘されている。いっぽう、後者は 2 類との関係もあって、系譜的には検討の余地がある。

壺形・甕形グループでは、口縁部に肥厚帯をも

ち、そこに複合鋸歯紋を施すものも同一グループと考える。しかし、口縁部外面に横位羽状沈線紋を施すものは弥生中期に下がるのかもしれない。このあたりは微妙である。無軸・有軸については時期区分の根拠にはならない。ただし、斜線横帯が施されるものは弥生中期に下がることはないだろう*。

2 | II 期・III 期資料について

2-1 時期区分

残念ながら細分できる資料は出土していない。そのため、以下では朝日遺跡編年に便宜的に対応させる。その是非の評価は今後の課題である。

2-2 I 系について

甕をめぐる

弥生前期 1B 類甕と朝日形甕の境界

Ab-SD65 下層 -442 は、口縁部が強く外折し、逆 L 字状に近い形態を持つ。口縁部は中ほどで肥厚し、口縁端部はハケメ工具で小さく押し引き状に刻みが施された後にヨコナデされる。Ba-SD 25 上層 -956 は口縁部の形状は上記例と同様だが、体部には斜位ハケメ後に二枚貝で縦位羽状条痕が施されている。J-SD23-621 は口縁部の屈曲が強く、端部は下がっている。SK44-654・SK45-655 も同様である。

上記例に対し、O-SD53-688、O- 包含層 -802 には頸部下に半截竹管による平行線紋が施されており、弥生前期 1B 類甕と共通している。Ba-SD29-526 は口縁端部が突出しているが口縁部そのものは矮小化しており、前記資料と同様の傾向を有する。

いっぽう、O-SK301-1 のように明らかに 1B 類甕でも頸部下に平行線紋を持たないものもある。

このように 1B 類甕をめぐるのは、八王子遺跡では他の遺跡に比べて変異幅が大きいと言える。

* 羽状沈線紋土器は、長良川上流の郡上郡八幡町勝更白山神社周辺遺跡（（財）岐阜県文化財保護センター 1995）でも出土している。八王子遺跡例や山中遺跡出土例に酷似し、北陸方面との連繫を示している。



隣接する山中遺跡ではこのようなことはなく定型
的であり、したがって両者の違いは時期差に由来
する可能性が高いと考える。八王子遺跡と同様の
資料は、当センターが調査した八王子遺跡の北東
5km に位置する木曽川町門間沼遺跡でも出土し
ており、参考資料程度とはいえ、1B 類最終段階
が型的的に分散する様相を見せている。

つまり、八王子遺跡には口縁部の矮小化を特徴
とする一群の資料があり、それには頸部下に平行
線紋をめぐらすものとめぐらさないものがある
が、両者とも 1B 類甕の系列に位置づけられ、し
かも口縁部の断面形状はまさに朝日形甕そのもの
なのである。私としては、これらを朝日形甕の原
型と考えたい。とすれば「朝日形甕」とは、口縁
端部の連続刻みが消失して単独の圧痕もしくはユ
ビツマミが口縁部四方に施され、体部外面を二枚
貝斜位調整で仕上げられるものを主系列とし、こ
れにいくつかの従系列を含んだ一群ということに
なる。

ところで、現状で後述する朝日形甕が弥生前期
に遡る可能性は皆無である。問題は、1B 類最終
段階資料の時期限定である。それが弥生前期なの
か弥生中期なのかについては、これまでのところ
一括資料がないのでどちらとも言えない。弥生中
期初頭における多条沈線紋壺の存在と合わせて、
時期的には弥生中期初頭に下がる資料があると
言うておく方が無難であろうか。

壺をめぐって

口縁部内面に段を有する壺

K-SD14-680 は口縁部内面が段をもつて肥厚し、
上面に沈線で複合鋸歯紋が施されている。類例が
多く、しかも系列的变化が追える資料がまとまっ
て出土しているのが唯一朝日遺跡であるので、そ
こからの搬入品である可能性が高い。所属時期は II
期初頭であろう。

線刻を有する壺

J-SD34-372 は太頸壺の体部大形片で、頸部
には二枚貝直線紋、頸部下には小さな段をもち、体
部はハケメ仕上げで無紋である。線刻は 2 ヶ所

にあり、頸部付近拓本左寄りに縦に 1 条、右寄
りに縦 4 条の沈線が施されている。所属時期は II
期後半と考える。

三角形刺突紋をもつ特殊な壺

ここで取り上げるのは折衷型である。

Ba-SD35-537 は受口状口縁で、口縁部外面
にはユビ押圧突帯がめぐる。屈曲部と上端にはハケ
メ工具による刻み、口縁部内面には三角形刺突紋
が施されている。口縁端部の条線はハケメ工具に
よるものである。III 期か。

同 SK80-558 は、口縁部外面にユビ押圧突帯、
口縁端部上縁に三角形刺突紋が施されている。II
期後半であろう。

特殊な形態の壺

J-SD30-647 は肩に稜をもつ側面観が台形の壺
体部で、上面に波状紋、側面に沈線紋と縦位に突
帯が貼り付けられている。突帯はユビで押圧が加
えられている。同一形態で櫛描紋の施されたもの
がもう 1 点出土している。III 期であろう。

2-3 II 系について

壺をめぐって

口縁部に波状紋をもつもの

Aa-SD65-458 は口縁部外面に波頂部が尖る二
枚貝波状紋、内面には振幅の小さい小刻みの二枚
貝波状紋が施されている。II 期前半。同 461 は、
口縁部外面は無紋で内面に乱れた二枚貝波状紋が
施されている。II 期後半。

Ba- 包含層 -604 は、口縁部外面に二枚貝波状
紋施紋後に刻み突帯を貼り付け、内面は二枚貝で
波状紋と直線紋を施している。II 期前半。O- 包
含層 -900 は口縁端部に浅い二枚貝条痕、内面は
無紋、外面はハネアゲ紋の上に刻み突帯を貼り付
けている。II 期後半。この 2 点は刻み突帯が施紋
工程内で不安定化していることを示している。刻
み突帯は単なるオプションになっていることを示
している。



口縁部上端を刻むもの

O- 包含層 -902・903 は口縁端部ではなく上端に二枚貝刻みが加えられている。同 905・906 と同様の手法であり、甕との同調を示す資料である。Ⅱ 期。

沈線あるいは半截竹管施紋をもつもの

部分使用 Ab-SD65 下層 -466 は口縁部上端が波状を呈し、外面上縁に沈線が施されている。沈線は波頂部で切れて弧線となる。本例は屈曲部外面にも押し引きが施されており、単純口縁壺の要素をもち珍しい。Ⅱ 期後半。

J-SD13 下層 -215 は頸部直線紋帯に縦位平行線を重ねている。同 SD18-232 は頸部のハネアゲ紋と直線紋帯の境界に沈線波状紋をめぐるしている。Ⅱ 期後半。同 SD30-370 は口縁部外面上縁に横位、頸部直線紋帯に縦位の平行線紋、横位直線紋帯下端に波状紋が施されている。Ⅱ 期後半。

K-SD104 下層 -179 は口縁部内面の乱れた波状紋と直線紋に重ねて半截竹管による平行線が加えられている。Ⅱ 期後半

紋様化したもの O-SD53 下層 -904 は、二枚貝条痕は体部外面のみ。頸部外面は半截竹管による平行線紋構成、口縁部外面はナデ調整で、内面は羽状紋構成となっている。口縁端部には沈線が施されている。Ⅱ 期初頭? 折衷型である。

二枚貝背面施紋をもつもの

付加的使用 Ab-SD65-464 は突帯に二枚貝背面で押圧を加えている。K-SD104-180 は口縁部外面の棒状浮紋に二枚貝背面圧痕が施されている。

主体的使用 二枚貝背面施紋が主体的に使用されるということを厳密にとらえれば、それをⅡ 系に含めることはできないが、二枚貝背面施紋土器が縄紋施紋土器と異なり条痕紋系土器とけっして無関係ではなく、系統的に周辺を構成する沈線紋系土器よりも近い点を考慮してここで触れておく。

Ab-SD65-460 は口縁端部が肥厚して水平に面をつくり、口縁部から頸部にかけて隆帯が垂下する。外面は二枚貝背面圧痕で充填される。同包含層 -951 は袋状口縁で、口縁端部と外面に二枚貝

背面圧痕が施されている。

J-SD34-640 は体部片で、上部に二枚貝背面圧痕が充填された方形区画と波状紋が施されている。

J- 包含層 -667 は沈線の直線・波線・直線に二枚貝背面施紋を重ねて単位紋様帯とし、上部に波線を配した無紋帯と交互に配置する。同 668 は沈線で横帯区画され、半円・方形の無紋部を配する。

以上はⅢ 期か。

2-4 Ⅱ' 系について

条痕紋系土器と完全に統合されてはいないが、一部手法の共有が見られたりして無関係ではない一群の土器である。沈線紋系土器系列群を基本要素とするが、他に壺形・鉢形各種を含む。

縄紋施紋土器について

帯縄紋

Ab-SK139-486 は鉢形土器で、口縁部に突起をもち、口縁部内外面、端部および外面に縄紋帯がめぐる。

ネガ・ポジ反転型

沈線による区画を基調とする。Ba-SK88-333 は上部に縦横交差紋様と下部に連弧紋帯を配する。

沈線紋系土器

沈線のみによる紋様構成

Ab-SD65 下層 -449 は体部片。肩の屈曲部に列点、体部外面に縁取り沈線をもつ三角形連繫風の変形工字紋が1 段めぐる。後続する紋様構成をもつ K-SD104-678 は、肩の屈曲部に列点紋、体部には変形工字紋が多段に施され、横型流水紋構成になっている。肩の列点帯が縄文帯に変換されると Ab-SD65-437 になる。

J-SB11-369 は口縁部が風化している。外面は無紋で内面に弧線が施されている。体部は肩の屈曲が強く刻みが施され突起が貼り付けられている。沈線はいずれも4 条1 単位で、上部には弧線、体部外面には縦位の区画沈線に相対する弧線、突起から弧線が左右に施されている。J-SD18-666 は、口縁部外面は中央の直線を軸に線対称に2 条1 単位の弧線を配し、内面は半単位を配して

条痕紋系土器の変異

縄紋（擬縄紋）施紋土器の変異

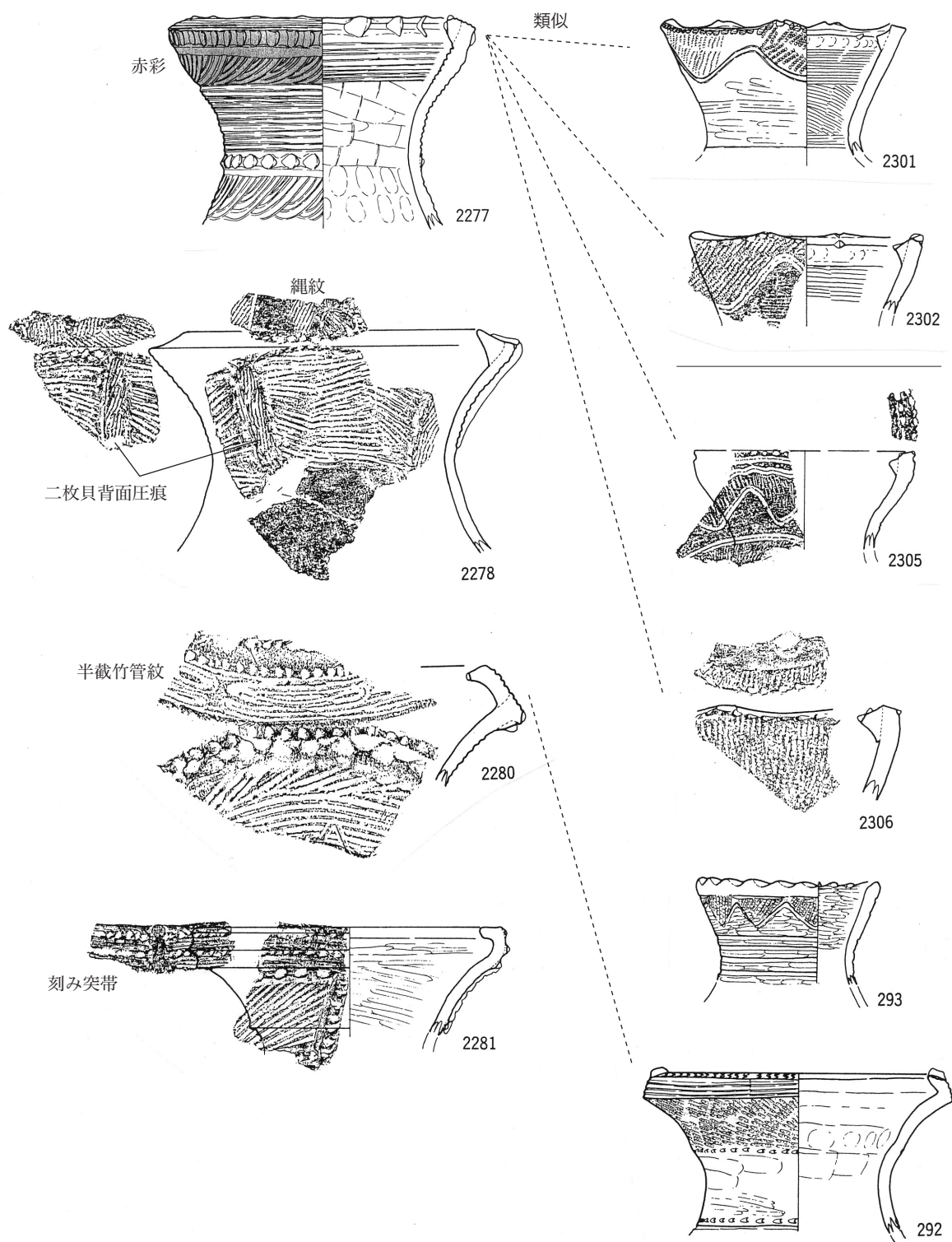


図5 朝日遺跡Ⅱ・Ⅲ期の土器

いる。K-SD104 下層 -182 は口縁部外面に沈線帯に挟まれた羽状沈線帯、体部外面には工字紋構成に羽状沈線紋が組み込まれている。

縄紋が施されたもの

Ab-SD65 下層 -450 は波状口縁で、口縁部外面は3条1単位の区画沈線帯が上下を画し、中央に縄紋が施された円形紋が配置される。区画沈線帯は、上部は口縁部上縁に沿って、下部は連弧状に施されている。同 448 は口縁部に小さく肥厚する突起部をもち、内外面の口縁端部よりの沈線は突起部で収束する。外面は中央の沈線を挟んで3条単位の沈線連弧紋が相対する。内面は紋様帯が段をもち、直線で区画された中に弧線が施される。

J-SB11-642 は Ab-SD65 下層 -448 と基本形は同じである。ただ、外面は沈線が多条となり、弧紋の収束部に相対する弧線が2条ずつ施され、

縄紋は欠落している。弧線が円形紋の変異なら Ab-SD65 下層 -450 につながる。

J-SD32-371 は口縁部外面に相対する4条1単位の連弧紋、体部には上下を沈線で区画した中に無紋帯と縄紋帯がネガ・ポジに反転して入り組む連続渦紋が施されている。同 SK41-652 は体部紋様の系列下にあるもので、基本紋様は縄紋帯による連続渦紋で、直上を無紋帯が縁取る。上部の区画は2条沈線で、無紋帯との間を縄紋帯とするが、渦紋に相対して弧線を加え内部を短線充填としている。弧線間には突起が貼り付けられていたようだ。

Ab-SD65-73 は甕形を呈し、口縁部は水平である。内面には刻みの施された棒状浮紋、二枚貝直線紋、沈線が2条施されている。外面は、口縁部から体部にかけて2条の沈線を1単位として区画や基本紋様が施されている。刻み突帯は沈線

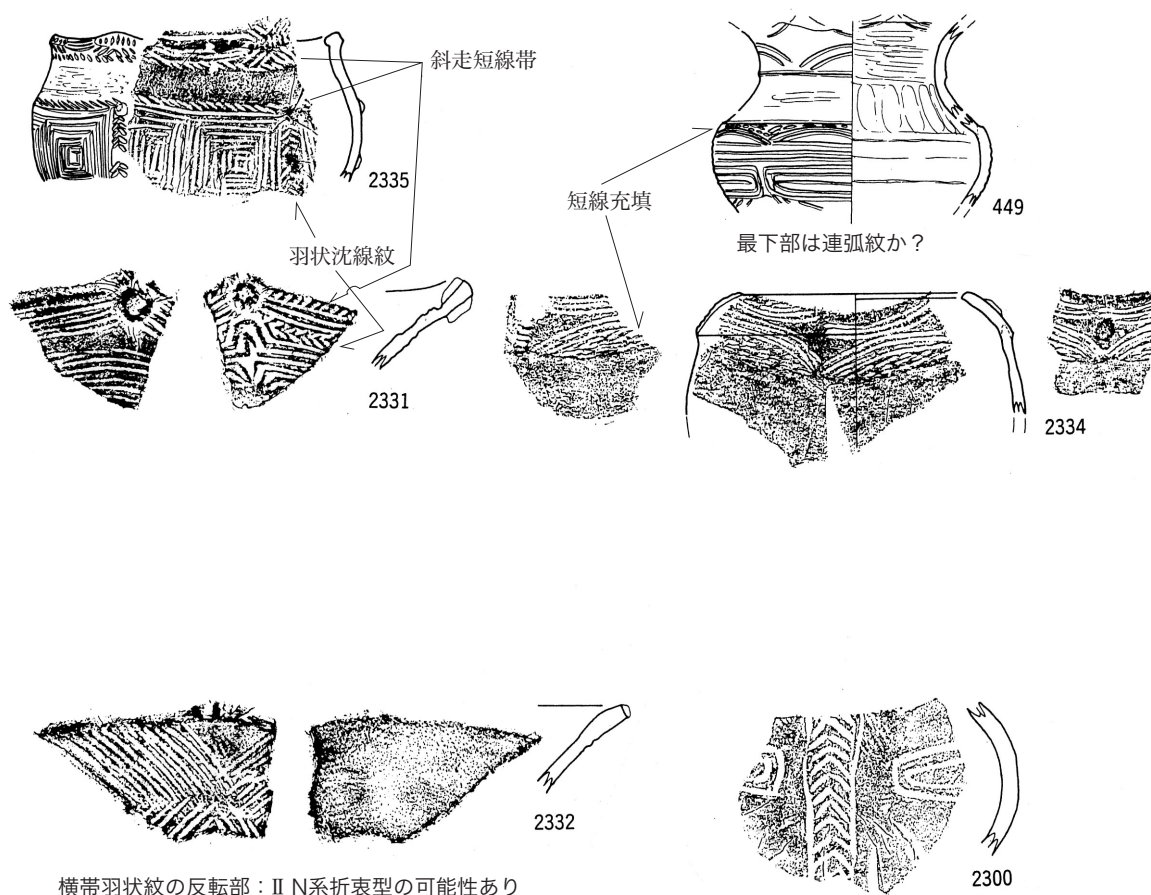


図6 朝日遺跡沈線紋系土器 羽状紋グループ他

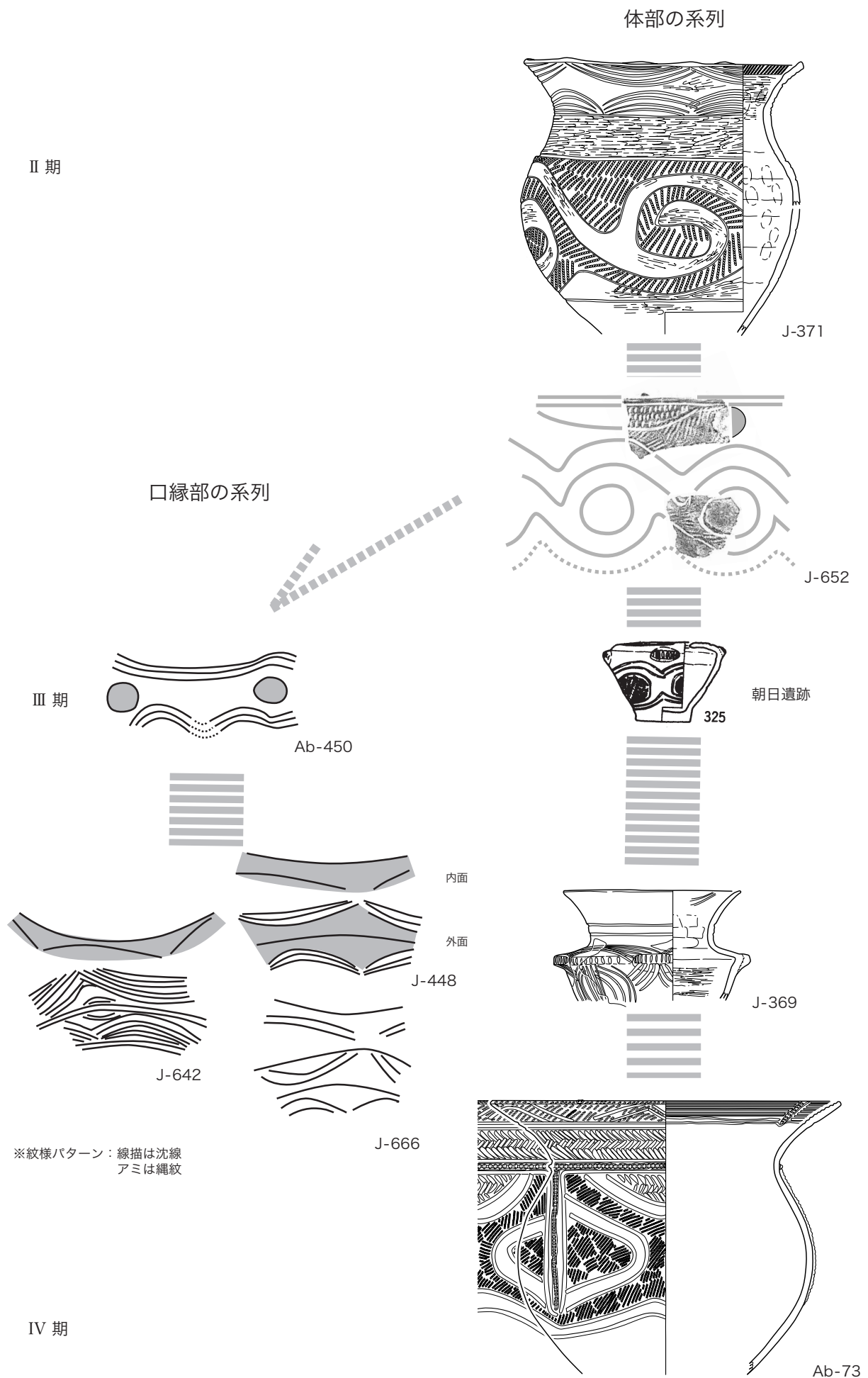
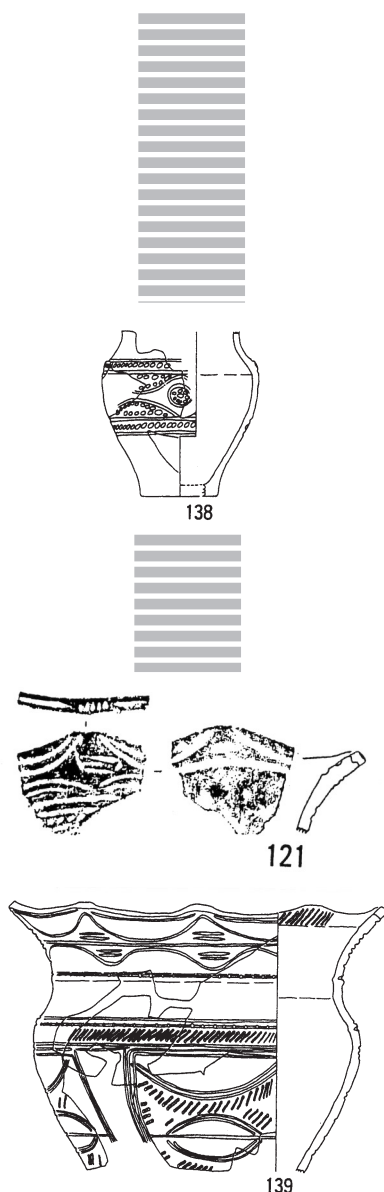


図7 八王子遺跡における渦紋から連弧紋への移り変わり

阿弥陀堂遺跡の系列



に縁取られており、頸部に横位、そして体部にかけてT字に垂下されている。縦位の刻み突帯を挟んで相対する弧線は円形紋の変異で、上部弧線区画内の単線充填は反転2回3段の羽状紋になっている。同様の羽状紋は頸部直上にもめぐる。紋様的にはJ-SK41-642の系列下にあると考えられる。いちおうⅢ期に含めて説明したが、Ⅳ期前葉までの幅で所属時期を考えておきたい。

上記のように当該土器の紋様構成は、入り組み連続渦紋→連続渦紋→円形連繫紋→相対弧紋という変化系列が考えられる。岐阜県阿弥陀堂遺跡資料も含めれば親和的な系列群が形成できる。阿弥陀堂遺跡では1B類甕最終段階資料が出土しており、八王子遺跡周辺と無関係ではなく、一連の変化が相互に関係をもって進んだことが考えられる*。

なお、Ⅳ期に盛行する円形連繫紋との関係については、両者の時期差は埋めようがなく、直接的な関係はないのであろう。

3 | Ⅳ期について

3-1 時期区分と分類

Ⅳ期の細分について定点になるのは未だに名古屋城三の丸下層資料群である。古新の2段階に区分されるが、その古段階はちょうど八王子遺跡Ab-SD49に対応する。ただし、それがⅣ期初頭までおよぶかといえ、それも微妙で、なお課題である。

甕はハケ甕を除いて、倒鐘形を呈するものが安定して存在する。朝日形、阿弥陀寺形、三の丸下層形の3系列である。

朝日形甕は、朝日遺跡で典型的に見られ、ハケメ系列(a類)と二枚貝系列(b類)がある。阿弥陀寺形甕は今回報告する八王子遺跡や阿弥陀寺遺跡で一定の頻度をみたもので、朝日遺跡ではわずかである。三の丸下層形甕は、朝日形甕の祖型

* 益田郡小坂町阿弥陀堂遺跡は、突帯紋系土器終末段階の精製土器群がまとまって出土したことで著名である。その後の調査では弥生前期～中期前葉の資料を追加し、弥生前期1B類甕も出土した((財)岐阜県文化財保護センター 1994)。美濃地域や三河地域内陸山間部では平野部ほどには濃密でないものの、多くの遺跡で1B類土器が出土している。伊勢湾西岸内陸山間部も含めて、果たしてそれらを縄文時代以来のネットワークに重なるものであると結論付けることができるのか、それを検証するためにどのような道筋をつけるのか、改めて考える時期にきている。



である 1B 類甕の再現のようでもあるが、朝日遺跡・名古屋城三の丸遺跡の狭い範囲に分布するものであろう。

阿弥陀寺形甕は、口縁部が強く外折れして内面に二枚貝刻みが施されるものを 1 類、口縁部が外傾して上端に二枚貝やハケメ工具で刻みがほどこされるものを 2 類とする。1 類と 2 類は時期差である。

3-2 I 系

Aa-SD49 からは当期古相から中相にかけてまとまった資料が出土している。基礎資料以外では Ab-SX09-96、J-SD30-240 が特徴的である。前者は、口縁端部、口縁屈曲部、頸部に櫛描直線紋、体部には幅広の櫛描直線紋帯に縦位直線が施されている。付加沈線は伴っていない。後者は屈曲部には刻みが施され、上部に縦位直線紋が加えられた櫛描直線紋と波状紋が施されている。付加沈線は伴っていない。

濃尾平野では単位紋様帯における直線紋と波状紋の組み合わせは中葉以降見られなくなる。体部屈曲部の刻みは IV 期中葉前半まではみられる。伊勢湾西岸部では波状紋が中葉まで残るようで、紋様構成の変化系列における地域差の把握が必要だ。

太頸壺

II' 系土器紋様をもつ資料

Ab-SK145-488 は口縁部内面に管状もしくは半截竹管状工具による刺突で囲まれた櫛描連弧紋が施され、収束部には瘤状突起が配されている。K-SD104 上層 -684 は上記資料と同様の紋様構成だが、突起は欠落している。同例は朝日遺跡で出土している。沈線紋を持つ土器は八王子遺跡では出土していないが、阿弥陀寺遺跡に類例がある。

沈線紋系土器は、I 期～II 期にかけて折衷型土器を生むことなく独自の系列を維持していた。紋様構成も沈線紋限定であったが、ただ親和的である半截竹管紋構成が若干例みられた。

III・IV 期になると I 系との折衷型土器が成立して櫛描紋構成が加わり、紋様の II' 系周辺は多様化する。この結果、体部紋様では櫛描流水紋が出現するのだが、もともと沈線による横型流水紋が基本系列のひとつであったからそれが櫛描紋化しただけでも言える。むしろ、沈線紋系土器の拡散がこれにとどまらず、II 系にも、また琵琶湖周辺地方においても認められる点が重要であり、さらに中部高地への影響は在地の主要器種の成立につながるといように、地域間交流の指標ともなっている。詳しくは後述する。

伊勢湾西岸部産あるいは 1W 系

特定できる資料は少ない。Ba-SD31-574 は頸部が円筒形で口縁端部には沈線がめぐりハケメ工具で刻みが施されている。頸部外面は沈線とハケメ波状紋が施されている。2 段目の沈線は 3 条で、縄紋施紋壺における沈線の用法と共通する。

伊勢湾西岸部資料は当該期についての検討が意外に不十分なのであるが、施紋工具にハケメを用いる点については、もう少し時空的な究明が必要だ。でないと、「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」との関係も見えてこない。

折衷型土器

Ab-SD65 上層 -74 は深鉢形で、口縁部上端に刻み、体部外面にはハケメ工具で縦位条痕が施されている。縦位条痕は左上がりの調整をまず施し、右上がりの調整を重ねて羽状にしている。

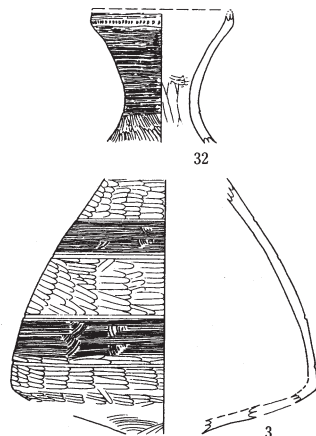
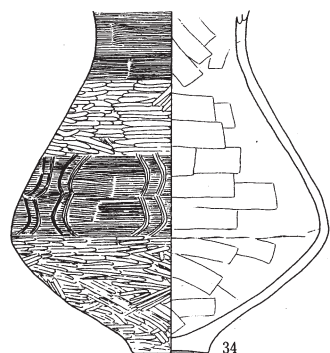
Ab-SD67-490 は、ハケメ工具で体部外面を縦位羽状に仕上げ、口縁部内面には押し引き紋を施している。

Ba-SD33-579 は頸部が緩やかに湾曲し、口縁部は内面に稜をもって小さく外折する。口縁部下端に器面に沿うように刻みが施されている。外面調整はハケメ工具で縦位に、下半は横位に施されている。内面はハケメ調整されている。外面調整は条痕紋土器と同様の手法であり、折衷型土器と考える。

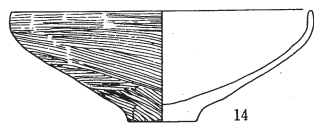
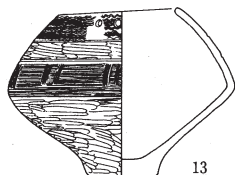
名古屋城三の丸下層
古段階

太頸壺

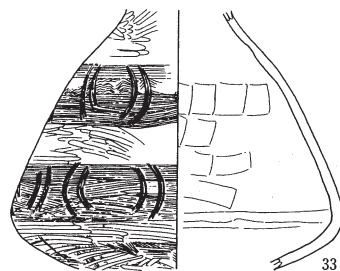
細頸壺



無頸壺：壺成形第2段階

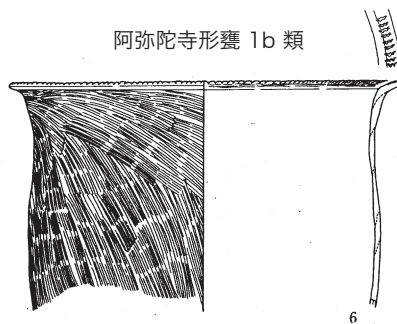
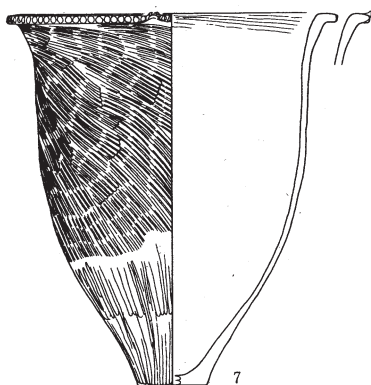


鉢：壺成形第1段階



三の丸下層形甕b類

阿弥陀寺形甕 1b 類



朝日形甕b類

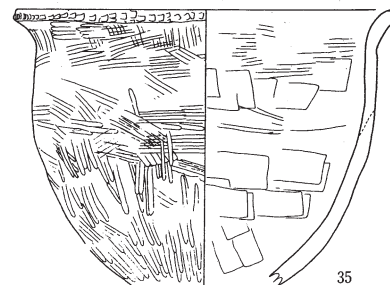
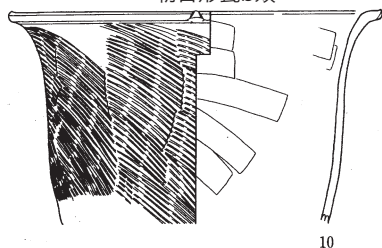


図8 IV期細分の定点

3-3 II系

時期区分と分類

IV期には、条痕紋系土器は完全に二枚貝条痕群と櫛条痕群に分離する。わたしは、前者をIIS系、後者をIIN系と呼んでいる。

IIS系は壺が長頸壺主流となり、初期には区画単位紋の配置、後半には横帯紋構成がみられる。

沈線紋では複合鋸歯紋が基本要素となり、頸胴部界をめぐる。もうひとつの主要な系列は二枚貝背面圧痕による擬縄紋手法であり。この場合には帯状ではない幾何学的な紋様構成が見られる。甕は口縁端部に条痕、体部外面に斜位条痕が施されるものは変異も無く安定している。

IIN系は、壺の存在が希薄で、深鉢・甕が技術系列における固有の器種となる。いわゆる「大地

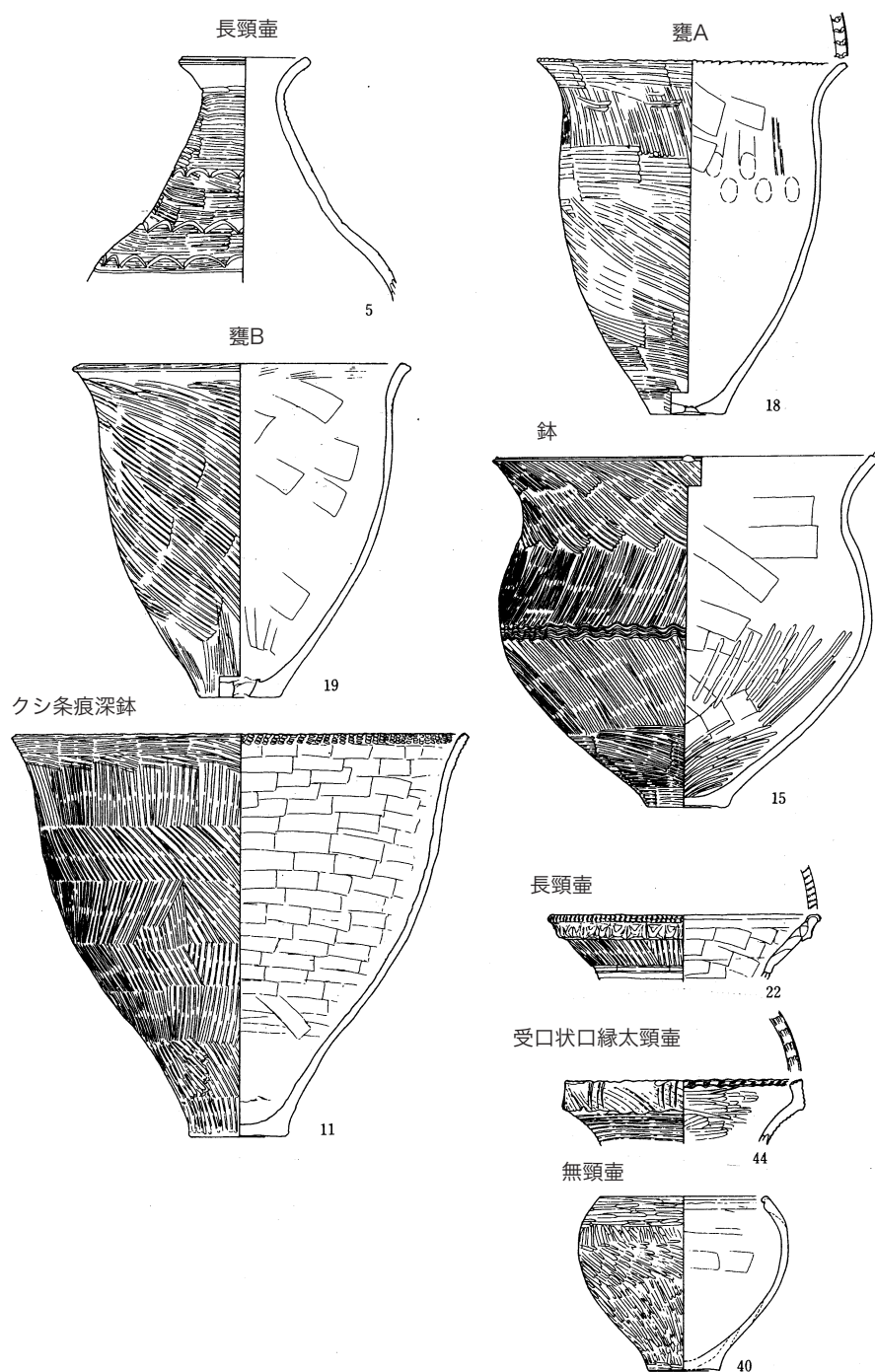
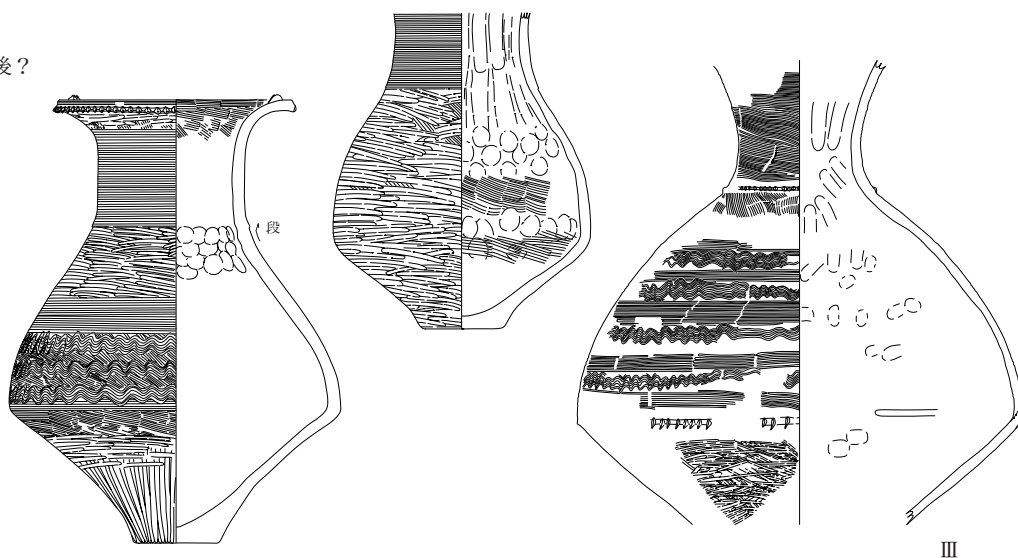


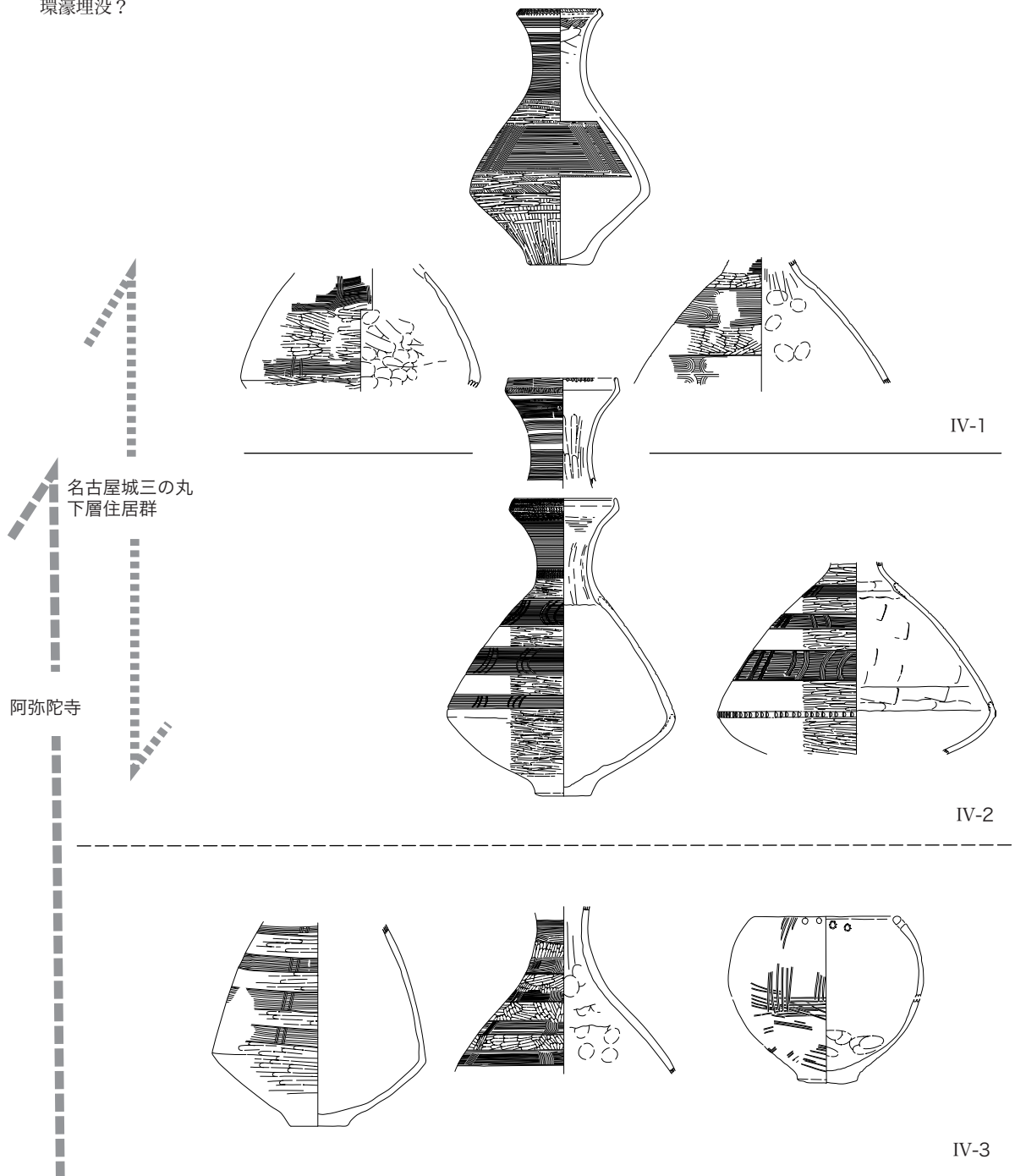
図9 名古屋城三の丸下層 古段階 II系

2重環濠掘削直後？



III

環濠埋没？



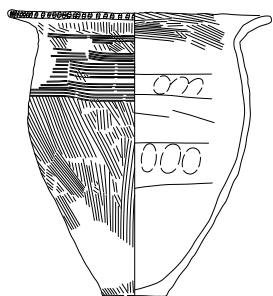
IV-1

IV-2

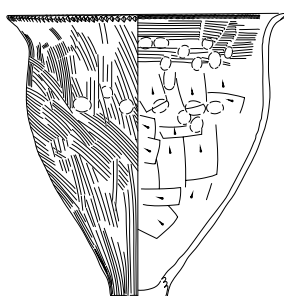
IV-3

図10 III期～IV期の細分

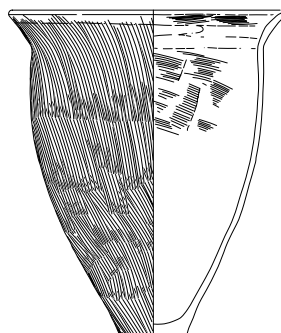
伊勢湾西岸ハケ加飾甕



折衷型甕

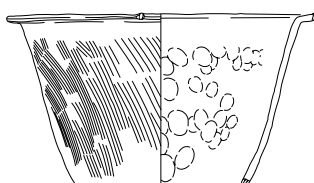


伊勢湾東岸ハケ甕

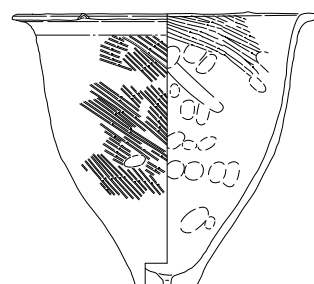
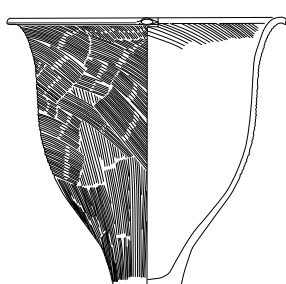


朝日形甕 / I 系

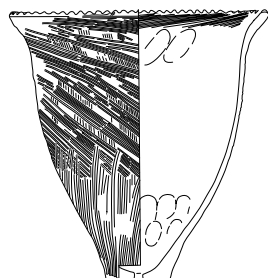
ハケメ系列 (a類)



二枚貝系列 (b類)



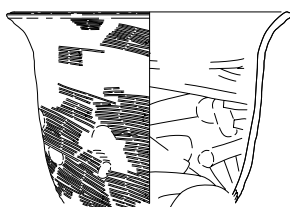
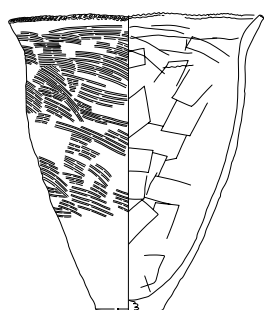
阿弥陀寺形甕 2b 類 / I 系



ミガキ底

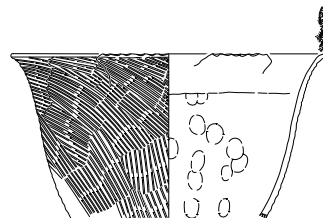
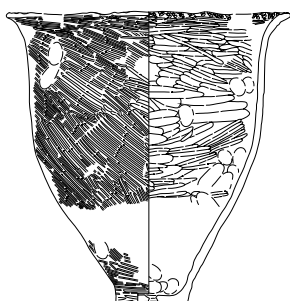
ハケメ整形群

二枚貝条痕系 / II S系



非ハケメ整形群

クシ条痕系 / II N系



木葉底 / 布目底

図 11 八王子遺跡 III 期～IV 期 甕の分類



形土器」を模倣製作することもあるが、せいぜいその程度である。

長頸壺

口頸部

口縁部有突帯 Ab-SD65-465 は、口縁端部は無紋で、口縁部外面には縦位条痕が施されている。同 466 は口縁端部がやや肥厚して内面に小さく屈曲する。

口縁部無突帯 Ab-SD65-467 は口縁部外縁に刻みが加えられている。頸部は沈線で区画され、上から縦位条痕、横位条痕、縦位沈線が施されている。

Ba-SD33 上層 -343 は、口縁端部に条痕と部分圧痕、頸部には上から二枚貝の縦位条痕、横位条痕、連弧紋、横位条痕、波状紋が施されている。同 575 は口縁端部に二枚貝背面圧痕が施され、内面に小さく屈曲する。

Ba-SD33 上層 -576 はラッパ状に開く口縁外面に棒状具による刺突紋、内面に棒状刺突紋、頸部には幅広の沈線帯がめぐる。なお、口頸部界は突帯状に隆起している。

半截竹管施紋 P-SB02-950 は、体部は二枚貝条痕、頸部には半截竹管で縦位直線紋、複合鋸歯紋が施されている。

体部

二枚貝背面施紋 Ab-SD65-456 は、下部は二枚貝条痕、中部は 3 条沈線帯構成の山形紋が施されている。上部は頸胴部界が 2 条沈線で区画され、その上に複合鋸歯紋が縦位羽状沈線紋が施されている。

Ba-SB01-555 は沈線で区画された下部に二枚貝条痕、上部は沈線で波状紋と二枚貝背面圧痕が加えられる。区画沈線には 4 条以上の縦位沈線が重ねられている。Ⅲ 期からの系列の最終段階か？

Ba-SB04-556 は、体部下半は二枚貝条痕、上部には複数の沈線で大きな波状紋が施され、二枚貝背面圧痕が加えられている。

縄紋施紋 O- 包含層 -776 は、体部片。左側が開く長楕円紋が縦に配置され、左右の長楕円紋間に

は管状工具で刺突を加えた浮紋が貼り付けられている。胎土には多量の雲母が含まれておい利、矢作川流域産であろう。

複合鋸歯紋もしくは羽状紋 Ab-SD65-495 は凹面をなす無紋帯を挟んで、下部は二枚貝条痕、上部には沈線で縦位羽状沈線紋が施されている。頸部が太く全形はイメージしづらいけれども、縦位羽状沈線紋が複合鋸歯紋になる過渡期の資料であろうか。

深鉢

縦位羽状条痕

Ba-SK82-559 は緩く外反する口頸部をもち、体部外面には櫛状具による縦位羽状条痕、口縁部内面には櫛歯刺突紋がめぐる。口縁部内面から体部内面下半にかけては条痕調整がみられる。体部外面の羽状条痕はやや乱れている。

縦位羽状条痕の消滅時期を特定する資料は少ないが、口縁部内面の刺突紋が器面に工具を合わせて施す手法がⅢ 期には見られずⅣ 期であることからⅣ 期でも前葉までは存続していると考ええる。

内面施紋

Ba-SD25 下層 -958 は口縁部内面に櫛によって連続する刺突紋と鋸歯紋が施されている。Ⅳ 期後半か？同 960 は口縁部上端に板状工具で刻みを加えている。刻みは途中で向きを反転させ円周上で複数の単位をつくっている。Ⅳ 期初頭であろう。

3-4 II' 系

Ab-SD65-79 は、頸部直下に刺突紋と幅の狭い重方形紋、体部は重方形紋を 2 段、刺突紋は上下と中央に 3 段めぐる。同 475 は、口縁部内面は縁取りされた沈線の中が、外向きのコ字状紋に羽状沈線紋、内向きのコ字状紋に刺突紋が施されている。外面は、横位の多条沈線帯に方形の割り込みと「く」字状の沈線を重ねて横型流水紋の変異型を構成している。同 476 は細いが鋭く深い沈線で多条沈線帯に菱形連続紋を重ねている。八

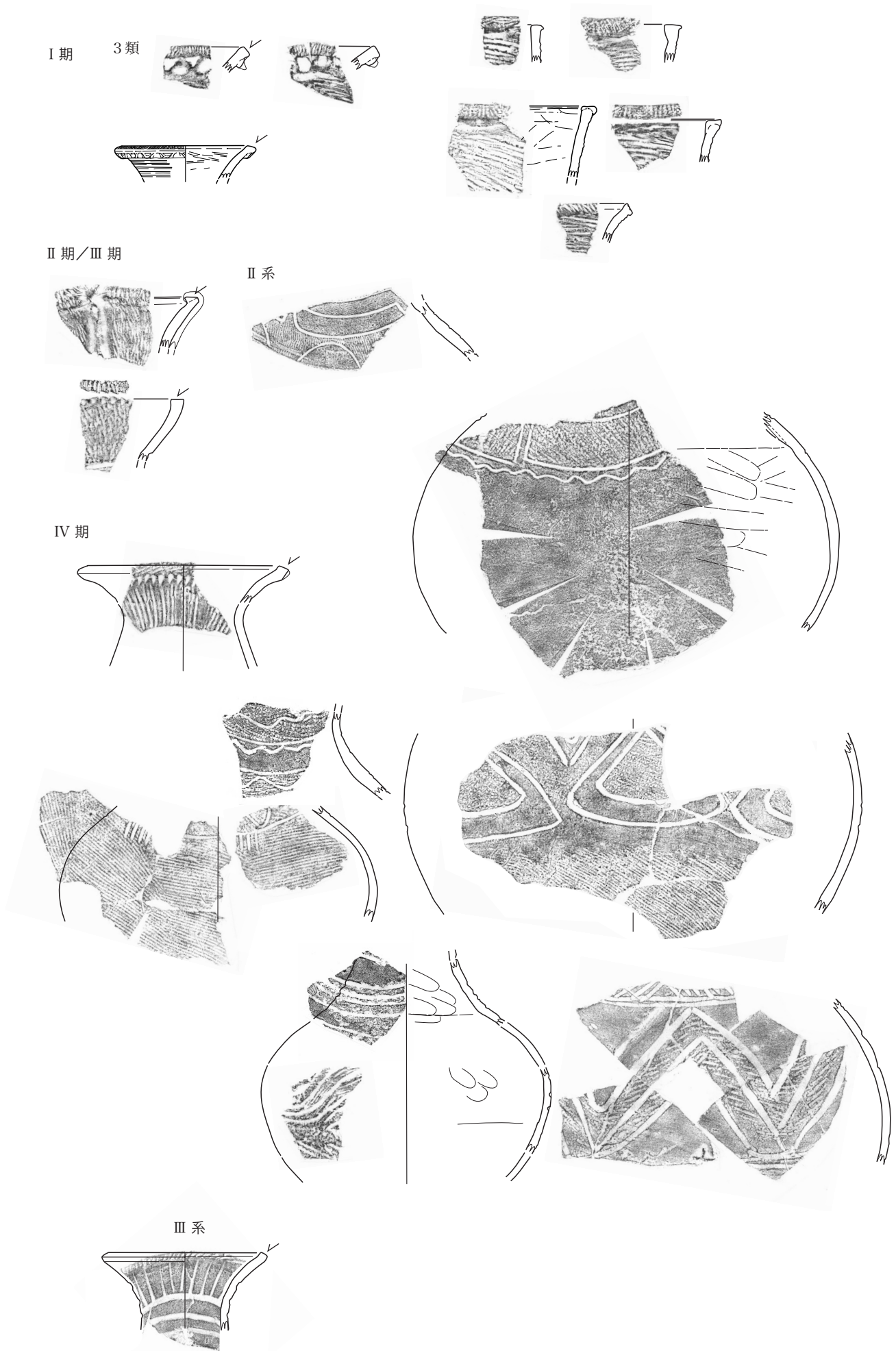


図12 二枚貝背面圧痕の系譜



王子遺跡では口縁部外面の羽状沈線紋の反転部が相対して菱形状の空白部分をつくる資料は出土していないが、これはそれに関係するものであろう。胎土的には IIN 系深鉢と同じであり、折衷型土器の可能性はある。

II' 系とは固有の《技術（紋様）・機能》系列を有する土器ではあるが、その分布圏において主要な安定した〈群〉を構成することはない。いずれにあっても基幹土器群の周辺に並存するにとどまる。それが III・IV 期になると濃尾平野や琵琶湖地方では折衷型土器の存在が顕著になる。このことについては別の機会に発表したが、ここで要約すれば、II' 系模倣土器の重要性は、模倣する側が写し取るために用意した器種の機能、そして当の写像において変異が生じる態様によって、模倣する側のレアな解釈を伺うことができる点にある。

すなわち、I 系においては貯蔵形態、琵琶湖周辺から北陸西部にかけてのハケメ甕分布圏や II 系では煮沸形態になっているというように、折衷型土器は大きく貯蔵系と煮沸系に分かれるだけでなく系統の違いに強く条件づけられており、これはつまり前者では II' 系土器の形状、後者ではその使用状況が器種選択の第 1 条件になっていたからだと考えられる。このことは当時の製作者とそれを取り巻く環境を直接に開示したものと評価でき、まさにわれわれが正しい意味で認知的な枠組みに考えを進める上で重要な手立てを与えるものとする。

ところで、問題は III 系の大形鉢（鍋）との関連である。確かに形態・紋様とも大きく変形しており、型式学的に同一とは言えない。だが、口縁部内面や体部外面に紋様が施され、かつ煮沸具である点を重視するなら、III 系の器種構造における位置からみて II' 系に置換可能であると考えても、あながち不当とは言えない。

3-5 III 系

出土資料は壺に限定される。太頸壺、受口状口縁壺、長頸壺、無頸壺がある。おもに中段階以後の資料が出土している。Ab-SD65-94 は最古段階資料で、濃尾平野では珍しい。

Ba-SD25-959 は長頸壺で、口縁端部には二枚貝背面圧痕が施され、内面が上部で微妙に屈曲している。Ba-SD33 上層 -575 の系列下にある。

3-6 V 系について

Aa-SD49 上層 -25 は、単純口縁甕の口縁部に粘土を付加して受口状にし、さらに山形部分を付設したものである。体部上半にはハケメ直線紋が施される。Ab- 包含層 -952 は頸部が強く屈曲するハケ甕もしくは壺。口縁部は部分的に山形をなす雰囲気がある。頸部以下は斜位から横位のハケメ。

J-SD10-967 は口縁部が波状をなすハケ甕。琵琶湖地方との関係を示す資料である。

3-7 その他

Ab-SD62-477 はハケ甕で、口縁部上端にハケメ刻み、内面にハケメ波状紋、体部にハケメ直線紋が施されている。Aa-SD49-949 は口縁部内面にハケメ波状紋が施されている。

4 VI 期について

方形周溝墓や銅鐸埋納時期に関係して重要な資料ではあるが、ここで述べることは少ない。まず、1 点目は甕の口縁部形態について。Ba-SD23-120 は口縁部が強く屈曲しヨコナデも顕著で、口縁端部がわずかではあるが拡張される。J-SD10-195・200、J-SX04-247・248・254 も同類でこれらは搬入品である可能性がある。口縁部形態が類似

するものは伊勢湾西岸域南部の雲出川下流域でも散見されるが、体部内面の調整は異なる。頸部にハケメ刻み突帯がめぐる Ba-SD25-137・J-SD 13-217 の系譜関係に重なるとすれば、琵琶湖地方北部の可能性もある。2 点目は、今回の八王子遺跡出土資料中において丸窓付壺はただ 1 点の

みであったことだ。しかも、小片であった。濃尾平野南部のように完形品は出土しなかった。つまり、丸窓付壺に関していえば、その朝日遺跡での一極集中が今回も確認できたわけであり、可能性として濃尾平野北部はその分布圏外とも言えようか。

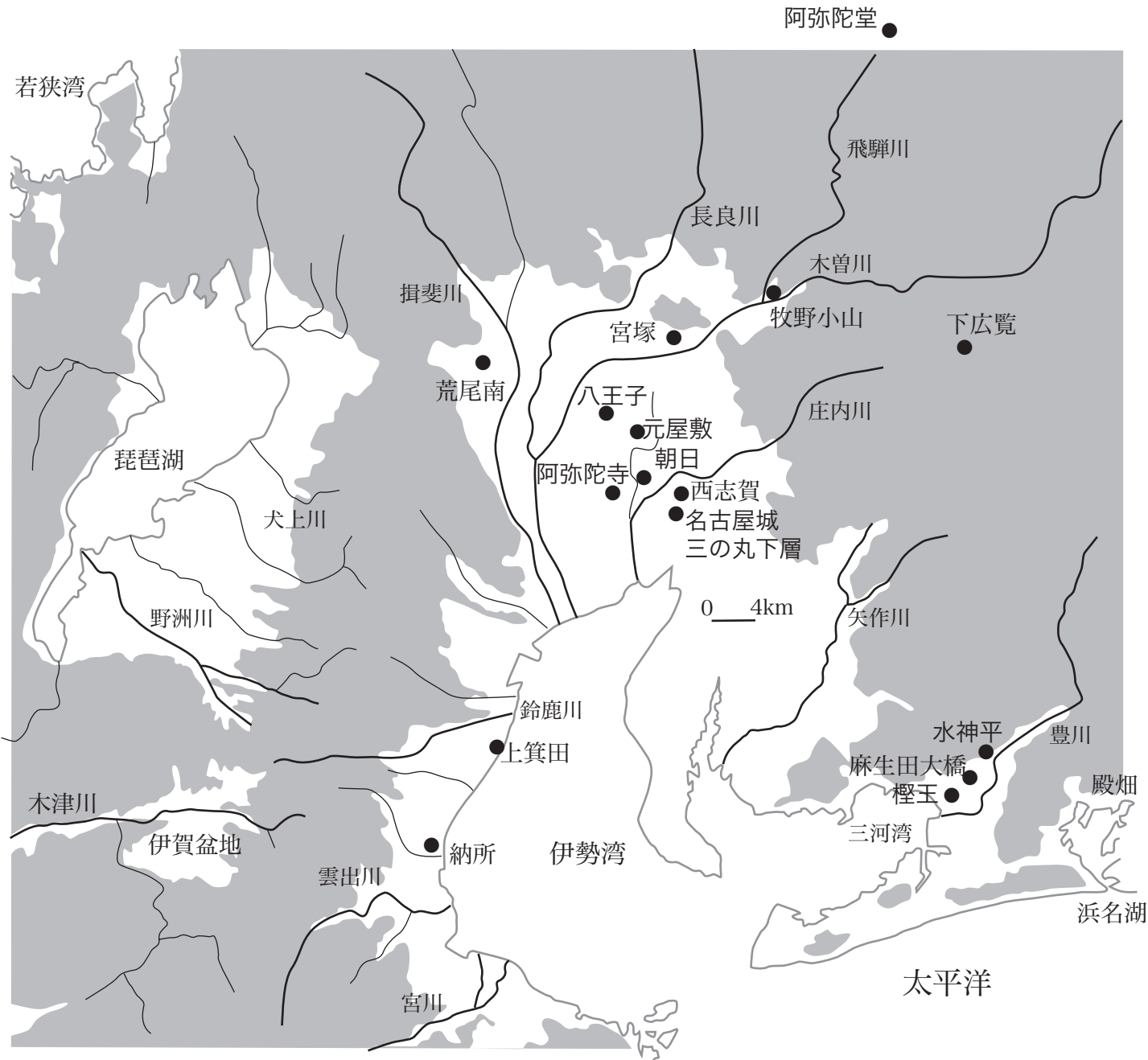


図 1 3 関連遺跡分布図